

# やまと 民俗への招待

鹿谷 勲

西郊民俗談話会という民俗学の研究会が東京にある。昭和32(1957)年からは『西郊民俗』という会報を年4回刊行している。昭和55(1980)年ごろ、当時、文化庁主任調査官だった天野武氏から、この会の中心として活動する大島建彦氏を紹介され、入会させていただいた。

この談話会が、会報の在庫を整理するというので応募すると、入会以前の会報30冊あまりが先日送られてきた。全国から民俗調査の各種の成果が毎回掲載されているので、早速目次を興味深く眺めていると、第86号に松崎憲三氏の報告「榎引き・人形引き」があった。これを読むと、奈良市城戸地区では、昭和30(1955)年ごろまで、松の内(正月15日まで)に人が「く」になると、その年に7度不幸があるとい

い、戸主が真夜中に木槌を引きすりながら無言で町内をまわり、北へ流れる川に槌を放り込んで逃げ帰る。棺の中へは身替わりの藁人形を七つ入れて埋めるとある。昭和52(1977)年調査。奈良市京終地区では、正月に死者が出ると町内に7人の死者が出るとい

うので、藁人形を作って縄を掛け、町内の者全部で引摺り、川へ捨てて後を見ずに逃げ帰るとい

奈良市京終町の町並み。2022年9月、筆者撮影



と各戸からの大人が1人または2人。行うのは葬式の後で、この槌は死人とともに葬った(前掲資料)。

松崎氏は県立民俗博物館の草創期の学芸員で、奈良盆地では正月に死者が出た時にこうしたことをするが、野迫川村では2人続けて死者が出た時や友引に葬式をする時に行ったと紹介している。

また先の林氏の調査によると、十津川村では子供の夜泣きを止めるため、横槌を負って家の周囲を1度まわり、戻ってきた時に待ち受けていた人が「何故か」と聞くと、まわった人は「夜泣きの守りをする」と答えるという。吉野郡一帯や宇陀郡では、夜泣きを止めるために夜にツチンコ(槌

の子)を縄で括って家を3回まわる習俗があることも紹介している。

県内で正月に死者が出た時に槌引きをする習俗は、本欄前々回に紹介した奈良市清水町、元興寺町、公納堂町の他、城戸地区、京終地区とあわせて五つの事例が判明したが、調べるとさらに増えると思われる。『西郊民俗』86号には、潮地悦三郎という人が、1年に2度葬式が続いた時や妊婦が亡くなった時には、人形や木槌を棺に入れる習俗が全国に分布していることを報告している。

新年や妊婦の死に際して、人形や木槌が身替わりのように登場することは全国的な分布がみられるが、奈良の事例もこれに連なりながら、町ごとの変容は興味深く、さらに事例を集めたい。

(奈良民俗文化研究所代表)

## 広がる槌と葬送の伝承

さらに天理市標本町でも、シメの内に死者が出た場合、横槌を新たに

作り、縄で括って垣内のなかを引いて3回まわる。引くのは、子供全員

さらに天理市標本町でも、シメの内に死者が出た場合、横槌を新たに

作り、縄で括って垣内のなかを引いて3回まわる。引くのは、子供全員